

附 編

岡大構内遺跡出土の自然遺物について

—井戸出土の種子を中心に—

山 本 悦 世

(1) はじめに

1983年に岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの前身である埋蔵文化財調査室が設置されて以来、発掘調査によって多くの遺構・遺物が出土している。それらは、随時、発掘調査報告書として報告されてきている。しかし、報告書の中心となるのは検出遺構、あるいは土器・石器

表1 種子一覧表

番号	種 類										調査地点	遺構番号 (発掘時)	時 期
	モモ	ウリ	ヒョウタン	トチ	クルミ	カン	センダン	コメ	ムギ	その他			
1	○	○ <sup>1</sup>	○		○					○	鹿田1次	井戸1	弥生中期後半
2	○			○	○					○	鹿田1次	井戸2	弥生後期前半
3	○				○						鹿田2次	井戸1	弥生後期前半
4	○										鹿田1次	井戸6	弥生後期後半
5	○										鹿田1次	井戸7	弥生後期後半
6	○										鹿田1次	井戸8	弥生後期後半
7	○										鹿田1次	井戸10	弥生後期後半
8			○		○					貝	鹿田1次	井戸12	弥生後期末
9	○	○ <sup>3</sup>			○						鹿田1次	井戸13	古墳初頭
10	○										鹿田1次	井戸14	古墳初頭
11	○	○ <sup>3</sup>	○								鹿田1次	井戸15	古墳初頭
12										雑草	鹿田1次	井戸17	古墳初頭
13	○	○ <sup>3</sup>	○			○	○			貝	鹿田1次	井戸20	平安(9c)
14	○		○				○				鹿田2次	井戸4	平安(9c)
15	○									貝	鹿田5次	井戸(3)	平安
16		○						○		貝	鹿田1次	井戸21	平安末(11c後半)
17						○				獣骨	鹿田1次	井戸22	平安末(12c初頭)
18										雑草	鹿田1次	井戸23	平安末(12c)
19	○										鹿田1次	井戸26	平安末(12c)
20		○ <sup>5</sup>					○	○		雑草	鹿田3次	井戸2	平安末(12c)
21	○										鹿田1次	井戸28	鎌倉(13c前半)
22	○				○						鹿田1次	井戸30	鎌倉(13c前半)
23		○ <sup>3</sup>			○						鹿田2次	井戸5	鎌倉(13c前半)
24		○	○								鹿田2次	井戸6	鎌倉(13c後半)
25		○	○					○		雑草・豆	鹿田5次	井戸(7)	平安末
26	○									獣骨	鹿田5次	井戸(2)	鎌倉
27	○										鹿田5次	井戸(4)	鎌倉
28	○										鹿田4次	溝2	平安(9c)
29	○						○			獣骨	津島6次	溝	平安
30	○										津島2次	溝13	近世

1：雑草メロン・マクワウリ 2：ザクロ草・イヌビユ・シソ科・カラムシ・タカサブロウ 3：マクワウリ

4：オナモミ 5：マクワウリ・キカラスウリ 6：コギシギシ

などの遺物であり、自然遺物の多くは、本文中に記載される程度で総括的に取り上げて報告してきたとは言い難い<sup>(註1)</sup>。ここでは、岡大構内遺跡で出土している種子・骨・貝などの自然遺物の中で、分析に耐える数の出土例があり、一定の検出レベルが保証されているものについて、現在、種目の同定が終了しているものを基礎に<sup>(註2)</sup>、時期的変遷を考えながら出土状況を検討し、いくつかの問題点・意義を考えてみたい。具体的には、種子では雑草類を除く大型の種子に限定<sup>(註3)</sup>し、そのほかには獣骨を対象とする。貝については資料数が少ないため、データを挙げるにとどめる。木製品についても、樹種の問題をとりあげて、近年中に総括的報告が為される予定であるため<sup>(註4)</sup>、略すこととする。また、自然遺物が出土する遺構として、井戸・溝・河道・土器溜り・貯蔵穴が挙げられるが、土器溜りについてはその例が構内遺跡で少ないこと、貯蔵穴出土の種子については、残念ながら、現在、同定が進行中のため完全な形で報告できないことから、井戸・溝・河道に限定する。取り上げる時期は、構内遺跡で確認されている弥生時代～古墳時代初頭・平安時代・平安末～鎌倉時代の四時期である、ここでは便宜的に各々をⅠ～Ⅳ期として扱うこととする。また、種類の同定が終了した構内出土の種子・獣骨・貝の一覧を表1～3に挙げておく。

表2 獣骨一覧表

番号	種 類						調査地点	遺構番号 (発掘時番号)	時 期
	ウマ	ウシ	シカ	イノシシ	イヌ	マダイ			
1	○						鹿田1次調査	井戸22	平安末(12c初頭)
2	○						鹿田3次調査	河道	平安(9c)
3	○		○			○	鹿田4次調査	河道	平安(9c)
4		○					鹿田5次調査	井戸(2)	鎌倉
5				○			鹿田5次調査	井戸(7)	平安末
6			○				津島3次調査	包含層	縄文
7	○						津島6次調査	河道	平安

表3 貝一覧表

番号	種	類	調査地点	遺構番号(発掘時番号)	時 期
1	ヤマトシジミ・ハイガイ・ヘナタリ		鹿田1983年度立会	貝塚	弥生後期初頭
2	ヤマトシジミ・ハイガイ・ヘナタリ・マガキ		鹿田1次調査	土器溜り2	弥生後期末
3	シジミ		鹿田1次調査	井戸1	弥生中期後半
4	ヤマトシジミ・ハイガイ		鹿田2次調査	井戸3	弥生後期後半
5	シジミ		鹿田1次調査	井戸12	弥生後期末
6	ヤマトシジミ・ハイガイ・ヘナタリ・ハマグリ ムラサキガイ・ゴマノフタ・サザエ・オオタニシ		鹿田1次調査	井戸20	平安(9c)
7	ヤマトシジミ		鹿田1次調査	井戸21	平安末(11c後半)
8	シジミ・ハイガイ		鹿田4次調査	河道	平安(9c)
9	シジミ		鹿田5次調査	井戸(3)	平安

## (2) 各時期の概要

### a. I期 (表4)

本時期には獣骨の出土は見られないため、ここでは井戸出土の種子について検討を行うこととしたい。

出土する種子の種類としては、モモ・ウリ・ヒョウタンに加えクルミやトチといった堅果類が挙げられる。出土する遺構としては井戸に集中しており、現在までのところ、他の遺構からの例は認められていない。井戸は、鹿田遺跡に集中する。これは、津島地区が弥生時代以降水田として利用されていたのに対して、鹿田地区は集落を形成していたためである。1～6次の調査によって合計49基の井戸を検出している<sup>(註6)</sup>。本時期に属するものは、その内の22基で、種子が出土する井戸は11基、全体の50%を占める。では、こうした種子は何を表しているのだろうか。

井戸から出土する遺物を考える上で問題となるのは、井戸の最終的な廃棄方法である。つまり、ただ単に使用済みのものとして放置して自然埋没したものか、何の行為もなく埋め戻されたものか、あるいは何等かの行為を行いながら人為的に埋められたものか、という点である。前の二者であれば、出土遺物は偶然性の高いものになってしまう。しかし、何等かの行為、つまり、井戸を埋めるに当たって為すべき非日常的行為（以下、便宜的に祭祀的行為と称する<sup>(註7)</sup>）が存在するとするならば、出土遺物は必然性の高いものとなり、それらの動向は注目<sup>(註7)</sup>に値する。このように出土遺物の意味を考える上では、そうした行為の有無を決めることが不可欠であり、出土種子についても、考える前提として、この点を詰めておく必要がある。本論とはやや離れるかも知れないが、井戸廃棄時の祭祀的行為についてここで簡単に検討を加えたい<sup>(註8)</sup>。

井戸における祭祀的行為を復元することは非常に難しい問題ではあるが、ここでは、注目する要素として遺物の出土状況と埋土の状況を取り上げ、それぞれについて特異な項目を選び出して検討することによって、そうした行為の有無を決定し、その上で種子との関係を考えることとする。

まず、遺物の出土状況については次の2項目が挙げられる。1点は遺物が不自然な状態でおかれていることである。つまり、完形あるいは完形に近い状態の土器が、流入土とは考えられない中層～底のある位置にまとも<sup>(註8)</sup>に出土し、本来は故意におかれたと判断される場合である。2点は特殊な器種がある一定条件のもとに入れられていると判断されることをあげたい。具体的には、非日常的な要素の強いミニチュア土器あるいはそれに類する土器が、完形あるいは完形に近い状態で井戸の底から出土する例に限定している。他の例、つまり、特殊な形状の壺や手焙り形土器などの出土例も認められる（1次調査井戸17）が、一定の条件での斉一性が認められないことからここでは除外した。埋土については次の4項目を設定した。1点は純粋な

炭・灰層が1 cm以上認められることあるいは多量の炭化物を包含する層が認められること、2点は焼土が多量に堆積すること、3点は井戸下半に植物質を含む厚い有機物層が明瞭に認められること、4点は赤色顔料を包含することである。これら6項目についてその有無を取り上げ、6項目中半数の3項目が認められるものに関しては祭祀的要素を強くもつ井戸と考えることとした。

以上の前提で各井戸を検討し、種子との関係を示したのが表4である。祭祀的要素の強い井戸として12基が抽出できる。全体(22基)に占める割合は55%である。また、種子が出土する井戸11基のうち9基がこの中に含まれ、祭祀的要素の強い井戸の75%を占める。前述したように全体の井戸の中に占める割合が50%であるのに比べて高い数値となる。種子を含んでいて3項目以上に達しない井戸は2基(1次調査の井戸2と井戸9)が確認されている。井戸2は井戸枠を有し、底部に完形に近い高杯が入っている。周辺には僅かに炭化物が認められた。井戸9はやはり底部に完形の甕・小形鉢が認められている。いずれも埋土に特異性が認められず、項目的には要素が低くなっているが、土器の出土状況から何等かの行為が存在したことを想定することもできる。そして、全く何も要素が認められない井戸では種子は検出されていないのである。以上のことから、祭祀的要素の強い井戸と種子が密接な関係を有していた、つまり、種子が祭祀的行為の中で重要な一要素となっていた可能性は高いと考えられる。

では、種子の中での各々の種類はどのような状況で出土しているのだろうか。まず、出土している種類は、前述したようにモモ・ウリ・ヒョウタン・堅果類である。それぞれの出土件数を数えると、モモが10基の井戸から、以下、ウリ3基、ヒョウタン2基、堅果類5基である。祭祀性の高い井戸12基の中での割合ではモモ8基(67%)、ウリ3基(25%)、ヒョウタン2基(16%)、堅果類4基(33%)となる。モモの出土率が7割近い値を示し他と比べて突出している点は注目に値する。また、種子を出土する井戸でモモが含まれないものは1基のみで、出土種子は堅果類の果皮に限定されている。1例だけのため、取り上げるには問題があるかも知れないが、モモなどの収穫時期が夏、そして、堅果類の果皮に限定されることを考えると、この井戸の廃棄時期が秋から冬にかけてであったため、モモが入らなかった可能性が想定される。

このように、モモ・ウリ・ヒョウタン・堅果類といった種子は祭祀的行為に結びつく可能性が高いが、その中でも特にモモはその中心を為しており、重要な要素として考えられていたことが窺われる。そして、井戸の廃棄時期についても、渇水期にあたる夏期がその中心となっていたことも種子の出土状況から言えるのではないだろうか。

表4 I期(弥生~古墳初頭)の井戸

時 期	調査地点	遺構番号 (発掘時)	種 子		貝	主 要 項 目						合計
			モモ	その他		①	②	③	④	⑤	⑥	
中期後半	1次調査	1	3	ウリ, 雑草 ヒョウタン		○	△	◎	◎	◎	◎	5.5
後期前半	〃	2	2	トチ, クルミ イヌガヤ		○	×	△	×	×	×	1.5
	〃	3	0	×		◎	×	◎	◎	○	×	4
	2次調査	1	6	クルミ		◎	×	◎	○	○	×	4
後期後半	1次調査	4	0	×		◎	×	◎	◎	×	×	3
	2次調査	2	0	×		○	×	×	×	○	×	2
	〃	3	0	×	○	×	×	×	×	○	×	1
	1次調査	5	0	×		×	×	×	×	×	×	0
	〃	6	6	×		◎	○	◎	○	◎	×	5
	〃	7	4	×		◎	○	◎	◎	×	×	4
	〃	8	0	×		○	×	×	×	×	×	1
	〃	9	1	×		○	×	×	○	×	×	2
	〃	10	2	×		○	×	◎	○	◎	◎	3
	〃	11	0	×		×	×	△	×	×	×	0.5
	〃	12	0	トチ, クルミ	○	◎	×	○	×	○	△	3.5
	〃	13	12	ウリ, クルミ カシ		○	×	◎	◎	○	○	5
	古墳初頭	〃	14	1	×	○	◎	×	◎	○	◎	×
〃		15	6	ウリ, ヒョウタン		◎	×	◎	○	○	×	4
〃		16	0	×		×	○	◎	×	×	×	2
〃		17	0	雑草		◎	×	◎	×	◎	×	3
〃		18	0	×		○	×	◎	×	×	×	2
〃		19				〈破壊で不明〉						
	5次調査	(8)	0	×	○	○	×	×	×	×	×	1

①：完形あるいは完形に近い遺物が不自然な状態で置かれていること  
 ②：ミニチュア土器あるいはそれに類する土器が底部に置かれていること  
 ③：炭・灰層あるいは多量の炭を包含する層の存在  
 ④：焼土を多量に包含する層の存在  
 ⑤：植物質を中心とした有機物を多量に包含する層の存在  
 ⑥：赤色顔料の存在  
 ◎：非常に顕著  
 ○：認められる, ①では点数が少ないが完形の場合を示す。  
 △：類する状況  
 ×：認められない  
 モモについては出土数を示す。  
 合計ポイントは◎○を1点、△を0.5点で計算している。

b. II期

本時期は、種子・獣骨について井戸と溝・河道でのあり方を検討する。

① 井戸 (表5)

検出井戸の総数4基の中で種子を出土した井戸は3基である。I期と同様にして、祭祀的要素の存在を探るため、諸要素を挙げたのが表5である。まず、埋土の状況からは、炭化物層が少し認められる程度で、際だった要素を抽出することはできないが、遺物面では種子を出土した井戸3基については、表でもわかるように、非常に共通性の高い状況が認められる。つまり、いずれも大形の井筒を持ち、井戸の底から斎串・櫛・尖り棒・刀子・曲物といった木製品・鉄製品が組合わさって出土するのである。I次調査地点の井戸20出土の刀子は木製であり、明らかに祭祀具である。また、斎串についても呪符的な要素が認められるなど、いわゆる祭祀具と見なすことのできる遺物が集中的に出土している。こうした中で、種子の出土状況をみていると、モモが3基(祭祀的要素の強い井戸に占める割合:100%)の井戸から出土し、以下センダン2基(同:約67%)、ヒョウタン2基(同:約67%)、ドングリ・マクワウリが各1基(同:33%)である。センダンが新たに出現しているが、全体的な傾向はI期と同じで、モモが祭祀的要素と深く結び付き、他にウリ・ヒョウタンが続くという状況は変化していない。このように、本時期には、井戸廃棄時の祭祀的行為において、種子については従来通りモモが密接に関わっていると考えられるが、I期と異なる点として、斎串・櫛・刀子・曲物などのいわゆる祭祀具が重要視されてきていることが挙げられる。<sup>(註9)</sup>

② 溝・河道

獣骨・種子を出土するのは、II期の段階の鹿田地区と津島地区の遺構である。

鹿田地区では3・4次調査において、河道から種子・獣骨が出土している。種子としてはモモが1点、そして、獣骨としてはウマ・シカ・イヌが認められている。少し詳細に出土地点の状況を説明すると、この河道では、カヤ・モミ属・アカマツの柱6本が確認され、橋脚遺構の存在が想定されている。それに加えて、護岸あるいは堰の機能を有すると考えられる多数の杭群も検出された。調査面積は狭くそうした重要な構造物が集中した地点であった。ここから出

表5 II期(平安)の井戸

調査地点	遺構番号 (発掘時)	種 子		具	木製品など(点数)					埋土内 炭化物	備 考
		モモ	そ の 他		斎串	櫛	尖棒	刀子	曲物		
1次調査	20	10	ヒョウタン、センダン ウリ、クルミ、カシ	○	1	2	3	1	1(完形) 6(底、破片)	○	井筒
2次調査	4	8	ヒョウタン、センダン	×	3	1	1	1	0	○	〃
5次調査	(3)	2			1			1	2(底、破片)		〃
〃	(5)	0									破壊

土したのは馬の顎骨及び歯の部分である。取り上げ後接合が進み、1頭分が復元された。出土した獣骨が頭部に限定されていることは注目される。シカ・イヌが出土した地点は、同一の河道内ではあるが、この杭群からは離れた地点で、構造物などは認められない。<sup>(註11)</sup>

津島地区では、津島岡大6次調査において、条里の坪境に当たると考えられる位置に東西方向の大溝が検出され、その中から種子・獣骨が出土した。種子はモモ・センダン、そして、獣骨はウマの歯である。出土地点の状況は鹿田と似た状況で、水利調節用の杭群が広範囲に検出されている。<sup>(註12)</sup>

このように、河道あるいは溝のなかでその機能上重要な地点において、モモやウマに関連したものが出土する傾向が窺える。Ⅰ・Ⅱ期の井戸でモモの出土例が多いことと共通する点は重要である。

### c. Ⅲ期 (表6)

鹿田地区ではこの時期に属する井戸で底部まで確認できたものは23基である。その中で、種子を出土するものは10基、全体の43%を占める。数値だけをみると、Ⅰ期の井戸総数22基に対して種子出土井戸11基の割合と大差は認められず、井戸と種子の関係に変化は無いように思える。しかし、詳細に検討すると、その様相にはかなりの隔たりが生じている。それを明確にするためには、やはり、井戸の埋没状況を明確にする必要がある。いくつかの要素に注目してまとめたものが表6である。

これを概観すると、埋土についてはⅠ期と同様に炭化物層の存在が比較的多く認められる。そのほかではあまり特徴的あるいは共通性の高い土層関係は認められない。一方、遺物のあり方では、器種的な偏りをみると、曲物・椀・小皿の出土例の多さが目を引く。ここで数多く出土する曲物は径15~20cm、高さ15cm前後の小形の完形品あるいは底板の可能性が高いものである。いずれも井戸の底部あるいは底に近い位置から出土する。23基中10基、全体の43%を占める。木器出土井戸の中では15基中10基となり約67%と高い数値を示す。次に多い箸が5基で33%程度であり、木器の中での偏りは明瞭である。しかし、出土数が多いことだけでそれが祭祀的行為に結び付くとは言い難い面も残っている。つまり、曲物が井戸利用に関わる機能を持つ場合は当然使用時の偶然性が高くなることは考慮する必要がある。この点についてはもう少し検討を加える必要があると思うが、ここでは曲物の形状から釣瓶的機能を想定するには紐掛け部分が無いことや出土する底板は全体の1/3~1/2程度の破片であることが多く、接合するものはほとんど無いことなどから、使用時の破損とは考え難い点を重視し、何等かの意味をもって入れられた可能性を考えたい。

土器については、井戸全体から出土するわけではなく、出土位置は大きく上層・中層・下層~底部の3ヶ所に分けられる。その中で、最も必然的行為と結び付く可能性が高く、検出例の

多い下層～底部で出土するものに注目してみよう。下層～底部と言うように幅があるのは井戸の埋没時の底面がどこにあるかによって底面レベルの移動が考えられるからである。底面が上昇する条件は様々であり、それらを区別することは困難であることから、井戸下半において最初に完形に近い土器が置かれた状態のものはこの範囲に入ると考えている。器種的に最も多いものは椀で、井戸底部まで確認した20基中11基において認められている。全体の55%にのぼる。小皿については5基、25%である。古い段階では小皿が比較的多いが12世紀には椀が中心となる。このようにある器種がある位置に集中する現象はやはり意識的なものと見なすことができる。今回の目的とややずれるためこれ以上の検討は略すが、本時期での井戸廃棄時の祭祀的行為の要素としては少なくとも炭化物層の存在、<sup>(註13)</sup>曲物の存在、椀・小皿の存在が挙げられる可能性が高いと考える。以上のような前提で祭祀的行為を想定させる井戸を抽出すると19基にのぼり、全体の83%を占める。

種子については前述の3要素から祭祀的要素の強いと考えられる井戸19基のうち9基から出土しており、47%を示す。ある程度の数値はでているが、Ⅰ期では12基中9基で75%、Ⅱ期では3基中3基で100%に比べると低下現象は明瞭である。また、その中で種類別にみると、モモ・ウリが19基中5基(26%)、以下、堅果類2基(11%)、ヒョウタン・センダン各1基(5%)、穀類3基(16%)という出土状況を呈し、かつて非常に高い比率を有していたモモ

表6 Ⅲ期(平安末～中世)の井戸

○：普通・出土例あり、◎：多量

調査地点	遺構番号 (発掘時)	種 子		獣骨	木製品他(点数)		井戸底部 出土遺物	埋土 炭・焼土	備 考
		モモ	穀類 其他		曲 箸 其他	物			
1次調査	21		コメ ウリ		2	スリコギ, 刀子		◎ ◎	木組枠
5次調査	(7)		コメ他 ウリ		○ ○	椀, 下駄, 杓子	椀・皿・木器	◎ (稲)	
1次調査	22			ウマ			椀	◎ ◎	破壊
〃	23		オナモミ		1 1		椀 曲物・椀	◎	
〃	24					浮き, 扇子			
〃	25				1 (井筒)		小皿	◎ ○	
〃	26	1			1		椀・小皿		
〃	27					楡		◎ (稲)	下半未掘
3次調査	1				1	穂, 栓		◎ (稲)	
〃	2		コメ ウリ, センダン				椀		
1次調査	28	2			1	棒	椀・木器	○	
〃	29				1 (完)		〃・曲物	◎ ○	
〃	30	1	クルミ		1		〃・〃		
2次調査	5		ウリ, クルミ			浮き	〃・小皿		
5次調査	(2)	1		ウシ	○ ○		小皿・ウシ		
〃	(4)	3			○ ○	穂			
1次調査	31								
2次調査	6						椀		
1次調査	32								
〃	33								
5次調査	(1)								
6次調査	(1)	○	ウリ			○(完)	椀		



の激減が特徴的である。また、種子の組合せをみてもかつては種子出土井戸の90%以上を占めていたモモが、10基中6基、60%まで下がっている。行為の不明確な井戸からの出土例も1例認められる。以上のことから、全体的に祭祀的行為の中に占める種子の重要性の低下が進み、特に、モモについては従来から担っていた他の種子とは区別されるその特異性を消失するという変化が認められる。ところが、こうした流れの中で、新たに出現する種子もある。コメ・ムギといった穀類である<sup>(註14)</sup>。3基の井戸からの出土ではあるが、意識の変化が生じていることを示すかのように興味深い。そのほかに獣骨の出現も注目に値する。ウマ・ウシの骨が1例づつ認められる。これについては、特に祭祀的要素が強い状態で検出された。1次調査地点の井戸22では井戸の上部に多量の炭化物を伴って1頭の馬骨が出土した。それらの骨の上部に頭骸骨が置かれた状態で、頭骨には致命傷となった傷が確認されている<sup>(註15)</sup>。解体後の埋納が考えられる。下層からは椀が出土している。また、5次調査地点では木組井戸の底部中央にウシの頭骸骨が1個、逆転して置かれている。下顎骨は無い。周囲の四隅には小皿が立てられていたようである<sup>(註16)</sup>。いずれも頭部が特別扱われている点で共通する。

前述のⅡ期の溝では既にウマの出土例が認められており、Ⅲ期には広範囲にそうした意識が普及することが窺われる。

### (3) まとめ

以上のように見てくると、井戸における祭祀的行為の中で自然遺物の占める位置が時代と共に変化することがわかる。ここで全体をもう一度まとめてみたい。

まず、種子と井戸における祭祀的行為との関係について見てみよう。

図1は表7に挙げた井戸総数に占める祭祀的要素の強い井戸の割合を示し、それに種子を出土した井戸の割合を重ねたグラフである。祭祀性の高い井戸の全体に占める割合の変化はⅠ期には55%程度であるが、Ⅱ期には75%、Ⅲ期では83%にまで上昇する。Ⅱ期の井戸については先述のように数が少ない上、その性格上、他の時期と同一に考えることはやや問題が残るが、少なくともⅢ期には内容の差はあれ、何等かの祭祀的行為が大半の井戸で行われはじめていることが想定される。そうした状況の中で、種子の出土する比率を見ると、Ⅰ期では全体では50%、祭祀性の高い井戸の中では75%、Ⅱ期には前者で75%、後者で100%、Ⅲ期では前者で43%、後者では47%である。これでわかるように、Ⅱ期とⅢ期の間で大きな変化が存在する。Ⅰ・Ⅱ期では祭祀性の高い井戸に占める割合が非常に高く、全体に占める割合と大きな差を示す。それに対して、Ⅲ期には、両者間に差は認められず、数値も低い。つまり、Ⅰ・Ⅱ期には、特に祭祀と種子の結び付きが強い可能性を窺うことができる。

次に、種子の中での各種類の状況を見てみよう。

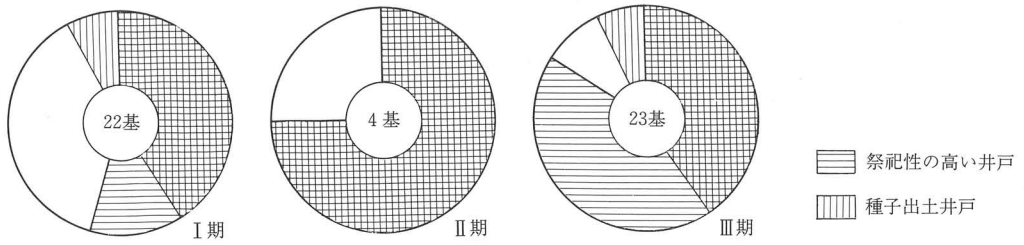


図1 祭祀性と種子の関係

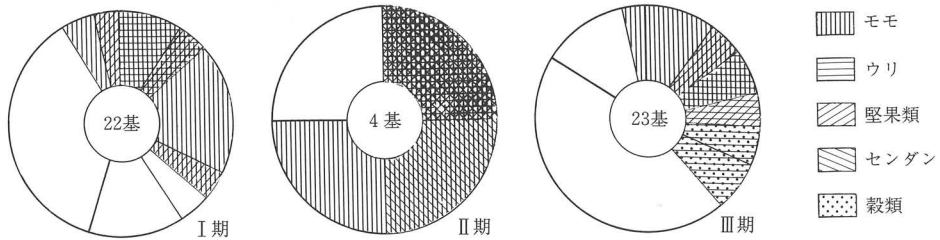


図2 井戸出土種子組合せ

表7 各時期の井戸に占める自然遺物一覧

時 期		I	II	III	I～III合計
井 戸 総 数		22	4	23	49
祭祀井戸数 (総数比)		12 (55%)	3 (75%)	19 (83%)	34
種子出土井戸数	対総数値	11 (50%)	3 (75%)	10 (43%)	24 (49%)
	対祭祀値	9 (75%)	3 (100%)	9 (47%)	21 (62%)
モモ出土井戸数	対総数値	10 (45%)	3 (75%)	6 (26%)	19 (39%)
	対祭祀値	8 (67%)	3 (100%)	5 (26%)	16 (47%)
ウリ出土井戸数	対総数値	3 (14%)	1 (25%)	5 (22%)	9 (18%)
	対祭祀値	3 (25%)	1 (33%)	5 (26%)	9 (26%)
ヒョウタン出土井戸数	対総数値	2 (9%)	2 (50%)	1 (4%)	5 (10%)
	対祭祀値	2 (16%)	2 (67%)	1 (5%)	5 (15%)
堅果類出土井戸数	対総数値	5 (23%)	1 (25%)	2 (9%)	8 (16%)
	対祭祀値	4 (33%)	1 (33%)	2 (11%)	7 (20%)
センダン出土井戸数	対総数値	0	2 (50%)	1 (4%)	3 (6%)
	対祭祀値	0	2 (67%)	1 (5%)	3 (9%)
穀類出土井戸数	対総数値	0	0	3 (13%)	3 (6%)
	対祭祀値	0	0	3 (16%)	3 (9%)
牛・馬出土井戸数	対総数値	0	0	2 (9%)	2 (4%)
	対祭祀値	0	0	2 (11%)	2 (6%)

出土種子の種類としてはモモ・ウリ・ヒョウタン・堅果類・センダン・穀類が挙げられる。種類の数としてはかなり限定的であり、選択された種子と考えることも可能であろう。

この各種子の出土率を検討したい。図3は各種子の出土率を表している。<sup>(註17)</sup>円周部が100%の出土率となる。ここにおいても、Ⅰ・Ⅱ期とⅢ期との差が明瞭に見て取れる(図3-1)。Ⅰ・Ⅱ期では新たに出現する種子の存在を除くと、共にモモにピークがあり、祭祀的要素の高い井戸に占める割合(太線)が全体の井戸総数に占める割合(細線)を上回る差についてもほぼ共通している(図3-2・3)のに対して、Ⅲ期ではピークもなく両者の差も認められず、種子の占める割合も極端に縮小している(図3-4)。図3-5では祭祀性の高い井戸の中で種子の出土率を示しているが、そうした傾向はより一層明瞭に認められ、そのラインはⅠ・Ⅱ期ではほとんど一致している。次に、図2にかえて各々の種子の組合せを見てみよう。Ⅰ・Ⅱ期ではモモの出土を示す部分に他のほとんどの種子が重複している。例外はⅠ期の堅果類のみを出土する1基だけである。ところが、Ⅲ期ではモモとウリが同率を占め、両者の重複

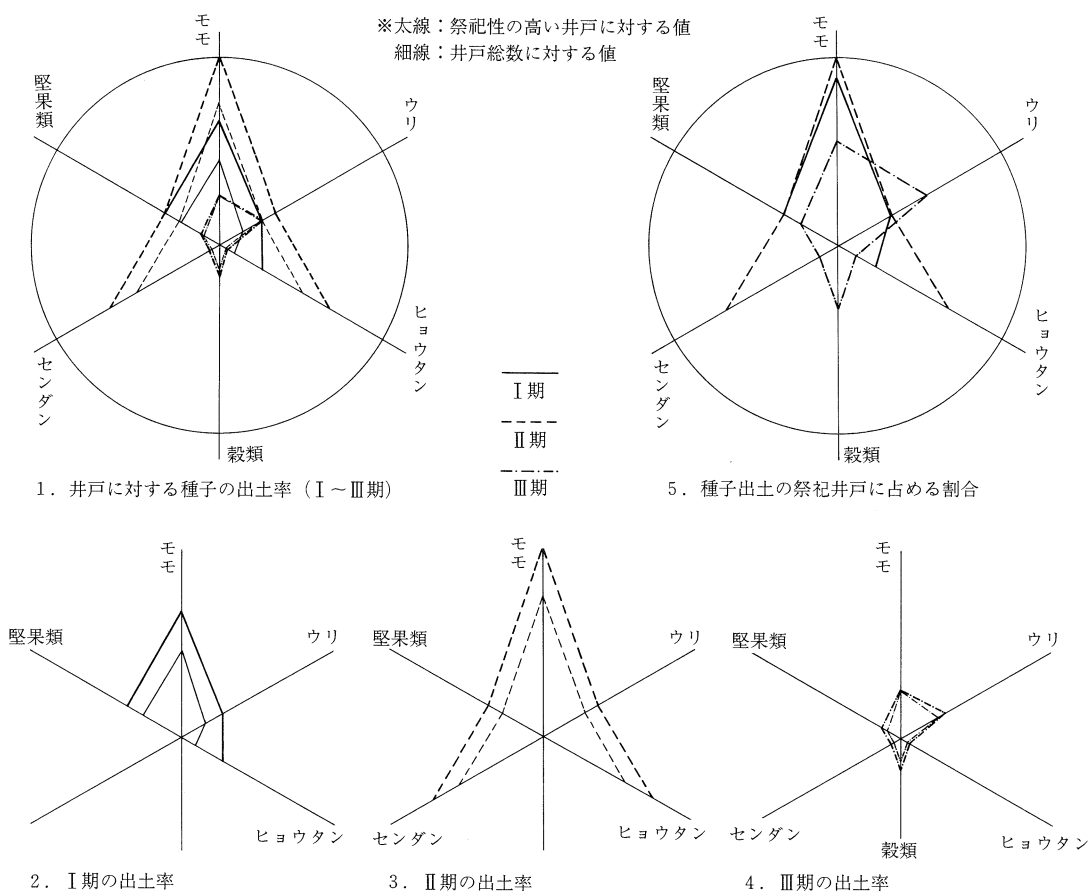


図3 種子の出土率

は1基のみである。そして、他の種子はウリと重複する傾向が強く、堅果類・センダン・穀類が含まれる。モモとの重複は堅果類1例のみである。以上のように、種子の中ではⅠ・Ⅱ期にはモモが他の種子に対して、圧倒的優位を占めているが、Ⅲ期にはそのモモの出土数の低下から種子全体の祭祀的行為に占める割合も減少し、あるいは種子の中では、ウリにとって代わられる可能性も考えられる。このように、種子の種類や組合せにおいてもⅡ期とⅢ期の間に差が認められる。

井戸出土の種子からは以上のようなことがわかってきた。それに加えて、獣骨の出現も考え合わせると、Ⅱ期までは祭祀上、重要な役目を果たしていた種子、特にモモの存在とそれにとって代わるかのようにⅢ期に出現する牛・馬（特に頭部）・穀類の出現、そしてⅡ期にはすでにある程度のセット関係が成立していたと考えられる祭祀具の存在など、Ⅱ期、つまり平安時代を境とした祭祀上の様々な変化を窺うことができるようである。

こうした現象は、井戸がその集落内でどういうものとして存在したか、その社会的違いの現れであると考えられる。このように、自然遺物からも様々な状況を考えることができる。ともすれば見落とされがちな遺物ではあるが、今後の積極的な分析を期待する。

## 註

1. 種子・獣骨についての報告としては以下の報告がある。

藤下典之「鹿田遺跡から出土したメロン仲間 *Cucumis melo* L. の種子、特に雑草メロン型の小粒種子について」『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊 1988年

松谷暁子「岡山大学構内遺跡から出土した炭化種子と灰像について」『鹿田遺跡Ⅱ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊 1990年

松井章「鹿田遺跡（Ⅲ・Ⅳ次調査地点）出土の動物遺存体」『鹿田遺跡Ⅱ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊 1990年

2. これまで構内遺跡で出土したものについては以下の方々の御協力によって同定が成されている。

木器：畔柳 鎮，能城修一， 種子：笠原安夫，武田満子，粉川昭平，松谷暁子

骨：鳥海 徹，松井 章， 貝：稲葉明彦

3. 種子については同じ種類の遺構においても、その採集方法によって検出されるものに差が生じることが考えられる。本来ならば、対象となる遺構の土壌あるいは可能性のある部分の土壌の全てを同一のレベルで水洗・選別して比較する必要がある。しかし、現状では多くの遺構で一部の土壌の洗浄にとどまっているため、草本類を中心とする小型の種子の確認例は僅かである。また、遺構内に入る偶然性の確率を考えた場合、モモ・ウリなどのような大型のものに比べ小型種子の確率が高いと想定される。以上のことから、ここでは草本類などの小型種子を対象物から除外している。

4. 能城修一氏によって構内遺跡出土の木製品についての総括的な分析が行われており、津島地区の遺物については1～6次調査分の報告が本年度刊行予定の『岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第5冊』に、ま

た、鹿田地区出土の遺物については1～5次調査分が来年度刊行予定の『鹿田遺跡Ⅲ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告』にそれぞれ掲載する予定である。

5. 近年の調査では、津島地区において検出した縄文時代の貯蔵穴内埋土の土壌をほとんど全て洗浄し種子を選別する作業を実施している。様々な種子が出土しており、種子の同定に期待がかけられている。
6. 『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊 1988年 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
『鹿田遺跡Ⅱ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第4冊 1990年 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
『岡山大学構内遺跡調査研究年報5』1988年 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
7. 「祭祀的行為」と言う名称について、その内容が明確にされない状態で使用するのとは問題ではあるが、ここでは、何かを意識して故意に行われた非日常的な行為として便宜的に呼称したい。
8. 井戸の祭祀を考える場合、井戸廃棄時の行為の他に、使用時のそうした行為の存在も考慮する必要がある。しかし、現象的に得られるデータは廃棄時の状態であり、特に、後者を区別することは困難であることから、ここでは本論の目的ともはずれるため厳密な区別をせず、廃棄時に重点を置いた形で祭祀性を考えることとする。

井戸の祭祀についての指摘は以下のような研究においても行われている。

水野正好「竹筒をのこした一井とその秘呪」『草戸千軒』No.36 1976年 広島県草戸千軒遺跡調査研究所

中野雅美「弥生・古墳初頭の井戸」『考古学と関連科学』1988年 鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会

9. 種子を出土しない井戸1基はその半分を他の井戸によって破壊され、本来の状態を残していない。
10. 鹿田遺跡の平安期の井戸については、その出土遺物に墨書土器・転用硯・木簡・丹塗り土器などが含まれていることや、他の遺構群との関係から、公的な要素を強く有していた可能性が高い。そのため、前後の時期と同一レベルで比較することは問題が残ることは否めない。しかし、少なくとも、種子に対する意識がこの段階まではⅠ期と変化していないことは明白である。
11. 『鹿田遺跡Ⅱ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第4冊 1990年 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
12. 『岡山大学構内遺跡調査研究年報6』16～17頁 1989年 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
13. ここでは種子との関係が本論であるため、鹿田遺跡で出土例の多い曲物にのみ注目して検討したが、他の遺跡では箸なども多量に出土する例が多々認められており、他の遺物についても要素として取り上げられる可能性はある。
14. Ⅰ期（弥生時代～古墳時代初頭）の井戸から穀類が出土した例として、川入遺跡が挙げられる。弥生時代後期に属し、炭化米・粃が検出されている。報告書では詳細は不明であるが、土器の器壁に付着して出土した可能性が高いということである。こうした出土状況を考えると、祭祀的行為に伴って必然的に入れられたものではなく、土器に伴う偶然性の高い資料と考えられるため本論での対象とはしないものである。

『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集 1974年 岡山県教育委員会

15. 『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊 1988年 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
16. 『岡山大学構内遺跡調査研究年報5』 1988年 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
鹿田5次調査の発掘調査報告は現在作成中で来年度に刊行予定である。
17. 図3は円周部を100%として出土率を示している。図3-1は各種子出土率を井戸総数に対するものと祭祀的な井戸に対するものとわけて表し、図3-2～4では図3-1を時期別に分離している。図3-5は祭祀性の高い井戸の中で種子を出土したのものに対する各種子の出土比率を示すものである。全体の井戸に対するものについては、対祭祀井戸の図と大差ないため省略している。

1991年12月10日 印刷  
1991年12月10日 発行

岡山大学構内遺跡調査研究年報 8 1990年度

編集 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
発行 岡山市津島中3丁目2番1号  
(0862)52-1111(内線246)  
印刷 サンコー印刷株式会社  
総社市真壁871-2  
(08669)3-2121(代)